

分科会11

「ホームレス」と「リカバリー」

～地域生活をはじめるといふこと：ゼロからの出発とその秘訣～

東京プロジェクト当事者メンバー（元「ホームレス」の方たち）

向谷地宣明（浦河べてるの家・べてぶくろ・ひだクリニック）

堀由布子（べてぶくろ）

澤田絵美（訪問看護ステーションKAZOC）

渡辺乾 訪問看護ステーションKAZOC）

司会：中村あずさ（世界の医療団・東京プロジェクト）

今までホームレス支援といえば、炊き出しや集団生活の就職施設に收容するといったような手立てしかなされなかった現場で、支援に適合しないという理由で路上に取り残されてきた／いる精神障がいなど生きにくさを抱えた人たちが、地域でゆるやかにつながり、仲間を支えながら地域生活をはじめています。

他の先進諸国とはちがひ、日本においては精神保健分野で今までなかなか取り組みのなかった、包括的地域支援と、コミュニティづくりに注力した地域での定着に挑戦している、その実践とたつぷりの魅力、携わるスタッフと当事者の生の声をお届けしました。

活動概要について

世界の医療団・浦河べてるの家（べてぶくろ）・TENOHASI で精神障がいのある「ホームレス」状態の方たちの地域生活を応援する取り組み＝東京プロジェクトは、そのチャレンジが評価され、2013年3月にリリー賞を受賞しました。

今年新たに立ち上げた訪問看護ステーション KAZOC と「元ホームレス」の当事者メンバーと日々模索しています。当事者メンバーとともに行うアウトリーチ、相談活動に始まり、シェルターや住まいの運営、地域生活の応援、日中活動、パン屋の運営、仕事づくり、仲間作り、地域活動への参加など幅広く行っています。

「ホームレス状態から・わたしのリカバリー」

Aさん、Bさんからホームレス生活から今までのこと、これからのことを率直に語っていただきました。

Aさんは幻聴に悩まされて仕事を辞めては路上生活という生活を繰り返してきましたが、東京プロジェクトのプログラムで料理や運動、遠足といったイベントに参加する中で（「自分で言うのもなんですが」＝ママ）明るく積極的な性格になり、グループホームを経てアパート生活に定着しました。今は趣味を楽しみながら仕事をする、ボランティア活動にも積極的に参加するなど充実した日を送っている様子をのびのびと語っていただきました。

Bさんは15年ほどホームレス生活をしてきました。暴力団やチンピラに利用されつつも缶拾いなどで食いつなぎ、転々としていました。今は仲間といることでパニック（解離性遁走）が止まり、安心して生活できるようになったそうです。

生き生きと語るAさんBさんに多くの質問が寄せられていました。

シンポジウム 地域で生活をはじめるといふこと

一元的・管理的な支援を人に当てはめるのではなく、その人がどんな希望があるのか、これからどうしたいのかという気持ち、本人とスタッフでかなえていくあり方。

でもスタッフ—当事者間だけでなく、地域で生活する仲間の存在が、実は大きな力になっていることをご説明しました。

元「ホームレス」の仲間が地域に増え、仲間の層が出来てきて、10 数年路上生活から脱出できなかった障がいや重いといわれる人たちも自然と受け止められるようになってきました。人とのつながりがポイント。

オープンディスカッション 「地域に出よう」会場の皆さんと一緒に

「ホームレス」状態から地域生活へのリカバリーは、現在の「ホームレス」の方々やそれを支える方たちに限らず、地域で生活する当事者の方、サポーターにとってもヒントになると思い企画しました。

質問では当事者メンバーへの質問が集中し、普段なかなか「ホームレス」の人に出会わない方との交流となったようでした。

中には「何を言っているのかよく分からない」というご意見もあり、精神保健の分野では浸透していない「ホームレス」から地域生活への移行の話がこの機会に多くの方と一緒にできたことが良かったと改めて感じさせられました。

《中村あずさ（世界の医療団）》